



第7646号

2022年10月26日(水)

安全とは限らない「垂直避難」

防災システム研究所所長 山村 武彦

◆母子3人、2階で死亡

大雨のとき、夜間や道路冠水時の避難は危険として、2階以上への「垂直避難」が呼び掛けられてきた。しかし、それが絶対安全とは限らない。

2021年8月15日未明、長野県岡谷市の住宅を巻き込んだ土石流で、小学生(7)、中学生(12)を含む母子3人が死亡した。3人はお盆の帰省中に2階で寝ていたところ、裏山から流入した大量の水と土砂に襲われた。

住宅に近接する崖は、上端が2階とほぼ同じ高さだった。長雨で緩んでいた斜面が局所的大雨で崩壊し、中央高速道路下の暗渠(きよ)を抜け、泥流となって2階の窓から流れ込み2階は土砂に埋もれた。1階はさほど土砂が入っておらず、地形や構造から見て、この住宅は2階の方が危険な場所だった。

◆家ごと流される場所

20年7月豪雨で氾濫した球磨川(熊本県)近くで見たのは、地上7メートルの電線にガスボンベ2本がぶら下がっている異様な光景だった。何度も水害を経験してきた住民たちも、これほどの浸水深は初めてだという。

未明から早朝に起きた洪水のため、亡くなった83人のうち、58人(70%)が屋内で死亡。このうち少なくとも7人は、2階へ避難していたとしても助からなかったと推定される。内訳は球磨村3世帯5人、人吉市1世帯2人で、とくに球磨村の3人と人吉市の2人は家ごと流されており、あとの2人は水没した2階で発見された。犠牲者たちの家は、洪水浸水想定区域図で「家屋等倒壊氾濫想定区域」に指定され、球磨川が氾濫すれば住宅が損壊・流失する恐れのある場所だった。

19年東日本台風で決壊した千曲川(長野市)沿いに住むSさん(79)宅も「家屋等倒壊氾濫想定区域」にあった。流失し基礎だけになってしまった自宅跡で、Sさんから次のような話を聞いた。

「翌日がお祭りで、娘夫婦が孫を連れて泊まりに来ていた。午後11時すぎに避難指示のメールが来た。夫婦だけならいつものように2階でやり過ごしただろうが、孫がいたので、念のために高台に避難した。その約2時間後に千曲川が決壊し、家は丸ごと流されてしまった。もし、孫が来ていなかったら私とかみさんは死んでいたかもしれない」

◆2階頼みは危険

これまで「夜間や道路冠水時は2階以上への垂直避難」が繰り返し呼び掛けられてきた。その結果、危険区域に住む人でも「いざとなれば2階に避難すればいい。わざわざ避難所へ行く必要はない」と誤った認識で逃げ遅れる人も少なくない。

地形、地盤、建物の構造などで洪水や土砂災害の危険度は大きく異なる。だからこそ、命を守る行動も家ごとに判断すべきだ。ハザードマップで床下浸水以下の区域なら、2階以上への避難でもいいが、「土砂災害警戒区域」や「家屋倒壊等氾濫想定区域」であれば、明るいうちに安全な場所へ向かう「水平避難」が原則。大雨警報、土砂災害警戒情報、線状降水帯予測情報が発表されたら、自治体やメディアは早い段階で「洪水・土砂災害の危険区域は、2階への垂直避難が安全とは限りません。安全な避難所へ一刻も早く避難してください」と具体的かつ明確にアナウンスすべきである。

(やまむら・たけひこ)

◆監修◆ 内外情勢調査会

◆委託編集◆ 時事総合研究所



コメントライナー購読者様へ(PR) ウォール・ストリート・ジャーナルを格安価格でご提供いたします! この記事に関する問い合わせは、時事総研(03-3546-2384)まで ◀◀詳細はこちらから

〒104-8178 東京都中央区銀座5-15-8 TEL: 03-6800-1111(代表) 本稿の一切の情報について、無断転載・複写をお断りします。©時事通信社 2003